



発行：救いの光教団
編集：神成編集室
東京都世田谷区北沢
(☎155-0031) 2-22-10
電話 代表 03(3413)0123
http://sukui.jp
毎月1回1日発行
購読料 1部80円
(会員の購読料は会費に含む)

2026
No.643
3月号

— 先祖供養 —

垂乳根の父母なくば現世に

此身此魂あらじとぞ思う

朽ちず焼けぬ宝というは目に見えぬ

徳を施す事にぞありける

人の身の尊き訳は諸の恩

心に刻みて忘れねばなり

(祈りの玉ぐさ 百十九頁)

御光筆『雲上観世音』



落款 自観
落款印 自観
昭和二十年教団所蔵

◎教団方針

信徒よ速やかに目覚めよ、
それは光を受け、邪を捨て、光を授け、
正に生きる事である

◎方針のみちしるべ

- (一) みつめなおそう明主様の心
- (二) つらぬきとおそう明主様の心
- (三) 教団綱領を尊び実践する
- (四) 信仰継承は家族と家庭円満から

神言霊

霊界が存在する所

(お伺い) 霊界とは宇宙の何処に存在するものでしょうか。
【神言霊】人間の住んでいる所に霊界はあります。また地球上有る高さまでは霊界はあるのです。北極や南極の様に人の住まぬ所には神界も仏界もない。普通は人間の住む所にあると思えばよろしい。

順序について(抜粋)

仏様を拝むたびに祖霊がたくさん来ますが、それは実に順序がキチンとされています。

大先祖は上段にいて、それからだんだん新しい先祖ほど下にゆき、親子兄弟、親戚と、その順序は正確に並んでいるわけです。だから家庭でもいろんな場合は、親子兄弟の順序をでたためにしないようにするのは、そうするといつも気持ちよく平和にゆくのです。争いや言い合いがあったりいろいろしますが、そういうときには座ることとかいろいろみな順序が違っているのです。それで親が座る所、長男、次男の座る所と、決まっています。それで食事のときに順序がチャンとしていると気持ちよくゆくのですね。それが順序が違っていると食事中に喧嘩したり気持ちが悪いです。そういうことは些細なことのようにあつて、大きなことです。ところが霊界にはいろんな邪神もいるし、反対派のほうの霊がいて、それが順序を壊そうと始終やっているのです。それが体に写っているようなことがあります。それで私を邪神は始終狙っています。しかし光が怖いから側には来



京都光悦寺の茶会に臨まれる明主様
昭和28年(1953)11月11日

れないが、遠まきにやっているのです。なにかあると、これは邪神がやっているなどすぐに分かりますが、それでとんでもなく順序を変えるのです。詳しく言うところなことで影響するかと思いますが、私を下にしようとするのです。といっても目に見えるようではないので、それは実に微妙なものです。そうすると私の光がちよつと跡切れるのです。それで跡切れるほど邪神の寿命が延びるのです。それはどうせ自分たちはもう長くないということは分かっているのですが、やはり邪神としての権力を持つてますから、その権力を一日でも長くさせたいのです。そこで私の光を妨げるのです。いままでのいろんな事件もみんなそれです。それによって一時延びるのです。しかし私のほうがだんだん強くなって、しまいは先が往生します。それからミロクの世になるのです。

(御教え集二十六号 昭和二十八年九月五日)

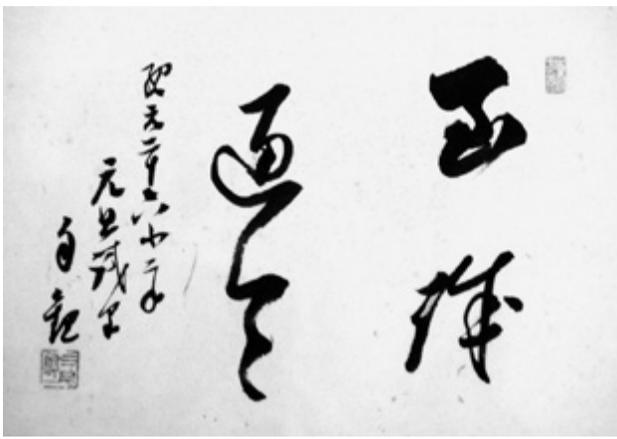
教団綱領の学び



誠と愛の人となり
利他の心を救いとして
世の光となるよう努力します(全三回)

【第一回】誠と愛の人となり

『至誠通天』



「至誠通天」は江戸時代末期に活躍した日本の思想家・教育者、吉田松陰の言葉で「誠を尽くせば、願いは天に通じる」という意味があります。御光筆『至誠通天』はこの言葉通り、心言行一致の誠が天、すなわち神に通じ、御守護と奇蹟が頂ける。という明主様から私たちへのメッセージが込められているのではないのでしょうか。この御心を受け止めて頂き、教団綱領を学ばせていただきます。

御光筆 至誠通天
印首印 東方光
落款 自観

落款印 三界歸一
紀元二千六百二年元旦試筆
(昭和十七年教団所蔵)

『誠』

世界も、国家も、個人も、凡ゆる問題を解決する鍵は『誠』の一字である。

政治の貧困は誠が貧困だからである。物資の不足は誠が不足しているからである。道義の頹廃も誠がない為である。秩序の紊乱も、誠のない処に発生する。

凡ゆる忌むべき問題は誠の不足が原因である。宗教も学問も芸術も、中心に誠がなければそれは形骸でしかない。嗚呼、誠なるかな、誠なる哉。人類よ、問題解決の鍵は、ただ誠あるのみである。

『誠の有る無し』

誠のあるなしを最も簡単に知る方法を書いてみよう。誠のある人は何よりも約束を重んじ、よく守る事である。単に約束を守る守らないだけでは世人は大した事とは思われないが、実を言うとなかなかそうではない。即ち約束を守らないという事は、人を偽った事になるから一種の罪悪を犯した事になる。約束の中でも一番軽視し勝ちなのは時間である。時間の約束をしておき乍ら守らない事をよく考えてみるがい。即ち先方は当てにして待っているその退屈や焦心はなかなか苦痛である。諺に曰う「待たれる身になるとも待つ身になるな」という事でも判る如く、待っている人の心持を察すべきで、其の心が湧かないのは誠が無いからである。とすれば外の事は如何に良くても何にもならない事になる。従って神の信者たる者は約束の厳守、時間の励行を疎かにしてはならない。もしその実行が出来ないとすれば、まず信仰の落第生である。信者たるものよろしく肝に銘じて忘れてはならないのである。

『大乘たれ』

私はいつもいう通り、大乘の悪は小乗の善であり、小乗の悪は大乘の善であるという事であるが、此の肝腎な点をどうも忘れ勝ちな信者があるが、之は大いに反省して貰わなければならないのである。判り易く言えば、何事も大局的見地から観察するのが大乘的観方である。それに就いてよく説明してみるが、一生懸命善と思っしてしている事が、結果に於いて案外教えの御邪魔になる場合がある。而も斯ういう人に限って自力的で人間の力を過信し、大切な神様の御力を不知不識忘れ勝ちになっているのは、誰でも覚えがあるであろう。

又、斯ういうことも屢々聞かされる。それは、あの人は随分熱心にやっているが、其の割合に発展しないのはどういう訳であるのかと訝るが、之こそ小乗信仰の為であって、小乗信仰の人はどうも堅苦しく窮屈になるので、人が集まって来ないから発展もしないのである。而も一番不可なのは、物事が偏りすぎるから常識を外れて、奇矯な言動をする。之を見て心ある人は、本教を低級迷信宗教と思ひ、軽蔑するようになるので此の点大いに注意すべきである。処が其の反対にそれ程熱心に見えないようでも、案外発展する人がある。斯ういう人こそ本当に大乘信仰を呑み込んで実行するからである。

今一つ言いたい事は、小乗信仰の人に限って、他人の善悪を決めたがる。之も私は常にいう事だが、人の善悪を云々するのはとんでもない間違いで、人間の善悪は神様以外分るものではないのだから、人間の分際で善とか悪とか言うのは僭上の沙汰で、如何に神様を冒瀆する事になるか分からないので、之程大きな御無礼はない訳である。何よりも斯ういう人に限って独善的で鼻が高く、人徳がないから発展しないばかりか時には縁でもない問題を起こし勝ちである。

此の例として、終戦前の日本をみればよく分かる。忠君愛国の旗をかついで、全国国民掛けでやった事が、あのような結果に終った一事であって、此の道理は大なり小なり何にでも当て嵌まる。成程その当時はみんな正であり善であると思つてやつた事だが、此の善は小乗の善であるから、自分の国さえ良ければ人の国などどうなつてもいいという利己的觀念の為其の報いである。それに就いて私は先ごろ「世界人たれ」という論文を出したが、つまり其の意味であつて、大乘の善即ち世界的善でなくては、本当の善とはならない事を示したのである。もちろん斯ういう考え方でゆけば、侵略戦争など起こりよう筈がないから、あのような悲惨な目にも遭わず、今日と雖も平和を樂しみ、世界から尊敬される国になつていたに違いないのである。

別言すれば、愛にも神の愛と人間の愛とがある。即ち神の愛は大乘愛であるから、無限に全人類を愛するが、人間愛は小乗愛であるから、自己愛や自分の仲間、自己の民族だけを愛するという限定的であるから結論は悪になる。此の意味が分かつたら信者たるものは何事に対しても、大乘でゆかなければならない訳で、即ち神の愛を確り胸に畳んで御取り次すること、必ず好結果を齎すに決まっている。故にどこ迄も神の御心を心とし、無差別的愛で臨む以上、誰しも快く接する事が出来、喜んで人が集まって来るのは当然であり、発展するのは間違いない事を、最近感じたまま茲にかいた次第である。

特別寄稿

大沼光彦大先生講演「妻を亡くして」(講演日不明)

このたび教団資料を整理おりましたところ大先生の講演を記述されたと思われる原稿が出てまいりました。今月は春彼岸をおむかえいたします。大先生の御言葉を通して祖霊供養について学ばせていただきましょう。

家内をなくしたということ、はじめてでございまして、苦い経験を致しました。神様はそういう事に合わない、本当の悲しみがわからないというようなことを教えて下さったような気がしますね。まあ味気ないという言葉は言いますが、確かに味気ないっていうのは、こういうものかと思つて、つくづくもう少し大事にしておいてやればよかったってね。もう今はそれだけです。昨日も友人のS先生にあつたら、御霊前でもつて、つくづく私に言うんですよ。家内の事もよく知つておられ、私が忙しいばかりで教団にいる事が多いし地方へ行く事も多く、一般の家庭と違ひまして、離れている時間が多いわけですよ。そこでS先生が言うんですよ。「まあ四十九日ぐらい先生、側にいてやつて下さいよ」と言われて、こっちはしみりしちやつて、もう、これじゃたまらないから、一日も早く外へ行きたいと思つたんです。そんなもんでしょね。この席にも、年配の男性の方がおりますが、ご婦人から見るとやはり、男性というものを理解できない場合がある。女性からみりや又、男性というものは、なかなか、理解が悪いなと思う方があります。男というのは、どうも、その、家内なんかには対してお世辞がましい事は言いきくんです。僕なんか、これとにそうなんだ。自分が間違つていても、頭下げない。それでも腹の中ではすね。年中「ああ、今年はどうして「やりたいな」と、で、もう、なかなかそう思つてまでもできないんですよ。もう「今年もできなかったけれども、一つ来年はあういうことをしてやりたい」「ああいうように一つ埋め合わせをし



大沼光彦大先生 (神成第23号・昭和49年10月号より)

よう」と、こう思っているんです。それで、まあ、今日まで、これということもしてやらないで、それで亡くなられたわけなんですけれども、やっぱり、その点が一番心残りなんです。それならば、もつとこうしてやれば良かったということだけが、一番打たれるんであります。結局、こういう仕事をしておりますから、生死ということは、あまり気にならないんですよ。よく家内とも話しておりまして、「まあ、病気になることも、苦しむということは嫌だなんて」。又「死ぬ時ぐらひは、ま、余り苦しまないで死にたいなあ」なんて、そんな話をしていたものなんです。生死ということは、かなり自分なりに悟つておつた。今、成城の近くにおるんですが、庭が小さいのです。そこへ草花なんかを作つたりするのが好きでして、何かもつと郊外の土地の安いところへ、引越そうよと、色々こちらの会長夫婦も力を入れてくれまして、それで現在の家を売るように致しまして、何とそれが、今から二十日ほど前に売れたんですよ。つまり、郊外ならば相当な所へ広く取れたわけなんです。それを当人も喜んでおりまして、そういう準備をしておる時に亡くなつてしまつたということ、やはり色々考えてさせられます。今お話ししたように、あ、してやりたい、こうしてやりたい、と口では、もつともらしいことを言つても、なかなか出来ないのが実状なんです。今月はお盆ですが、皆さん方は真面目にやつておれば、一切守護してくださいと思う。それは間違ひありません。しかし神様の御守護とか、ご先祖の御守護を頂かなければ、なかなか恵まれた生活はできないと思つて。

今度、このことがありましてから幹部の方に会う機会がありまして、大石先生と話し合つたんですよ。結局、大神様となりますと、色々霊的関係があり、こちらに曇りもあり、数々の罪もありますので、直接お願い事を申し上げられないんです。ところが明主様が地上におでましになって、そして地上天国建設の御啓示をなさる。どんなわからないこと、どんな小さなこと、つまらないこととお伺いしてもお受けくださった。今は霊界におかれまして、特別な御立場なんです。皆さん方が色々とお願ひすることも、まず皆さん方に因縁のある神々があり、又皆さん方の祖先などが霊界におかれまして、その願ひ事や気持ちも汲んで、聞いた事柄に御守護下さるのですが、そのご先祖や皆さん方に因縁の深い神々が、その願ひごとに対して希望を入れる力がない場合、それを明主様にお願ひして下さい、それを大神様に順次お願ひして下さい。こういう段取りなんです。それではお互いどうすればよいかという、今まで通り、神仏を敬ひ、尊び礼を尽くし順序礼節をわきまえて、ご先祖を大事にしなければいけません。明主様は氏神様になつて礼儀をとらんといかんと、こう仰つていらっしゃるんですから、氏神様は氏神様として、その因縁のある場所を守護して下さいというわけですね。やはり墓所もそういう意味なんです。御承知の通り霊界には段階が沢山あり、ご先祖の中には仏界にまだ居る方もあるし、仏界において修行して、又神界にお入りになるわけですから、神界に入つたつて、まだずっと下の立場の方も山ほど居るわけなんです。ですから、供養ということはしなきゃだ

めです。真面目にやるのが結構なんです。供養は真心を込めて拜むことが大事なんです。うちで会長夫妻が懇意にしておつた、日本で有名な霊学者から告別式の日電話がかかつてきました。今、そのお母さんがとても喜んで階段を上がつて言つて言つて言つて言つて。天国への道が上がつて。ところが、その話は前後しますが、お通夜の晩に、うちの会長が故人の側へ杖を持ってきて脇の下に入れたんですよ。こういう風に布団が掛かつていました。変な事をするなど思つたけど、何かあるんだろうと。こっちは、大事な時だから、まさか文句言つてやらない。杖やつておつたのに、杖を取れという訳じゃないからね。そうしたら、今の霊的な非常に優れた方がね、先程、お話しした通り年をとりまして、腰が坐骨神経痛で階段を上がるのにあまりすたすた上がったのは事実なんです。非常に痛むということはございませんでしたけれども、それを考えました。なるほどなあ、霊界に行つて「杖があつた方がいいのかなあ」と、霊界に行つたら杖も霊だからね。またうちの嫁さんはなかなか気が利いておりましてね。よくしてくれました。三度三度心を込めて御膳部を上げ、それを階段を上がりながら非常に喜んでおつたそうです。何といつても霊界へ行くとき食べ物大事ですよ。御存知だと思いますが、自分ではそんなに食べきれない、それをこく僅か食べればいいわけですから、それを皆、因縁のある人々に、霊界で分けてあげるわけなんです。

(中略) やつぱり人間というものは、食べて生きていますもの。かえつて逆に一般の人はそういうことを知らないから、仏壇にものを供えようとしてもしない人が多いんですよ。中には供えとくつていうとね、もう幾日もあげつばなしでいる家ね。蠅やなんかがたかつかつても平気である家、食べないからいいんだらうと思つておるんですよ。かざりだけやつたから、いいつていう考え方だと思つて。第一、御承知の通り、真心こめてあげなきゃ、召しあがらないんですよ。だから皆ひもじい思いをしてるんですよ。だから皆さん方が、供養の為におわけすれば、それを大勢の知つておる因縁のある方々に、わけてやるから、ま、顔がよくなると、こういうわけですね。それから大事な点は、繰り返すようですが、何と言つたつて、神様の御守護を頂こうとするならば、やはり人助けをするということです。

霊界にお互いの祖先が、霊界で恵まれたところにおれば、現界の吾々は、その徳によつて幸せにやつていける。こちらが喜んで幸せな生活をする。社会や世の中の為にするべきですね。又それが祖先に移つて、祖先が又、向上するといふような、そういう関係ですから、片方が上がれば、お互いが、皆さん方がよい生活をすれば祖先も上がり、祖先が向上すれば、お互いの子孫といふものも向上していく、そこに一点も過ちはないし、真理であります。信仰の醍醐味といふものはそういうものなのであります。(以下略)

※1 大沼昌司先生と光守様

※2 光守様

トピックス

明主様御墓所参拝奉告

会長の新年参拝に続き東京教会信徒有志の団体参拝が執り行われる

令和八年・二〇二六年の新年を迎えて間もない一月二十五日、東京教会信徒ほか有志一同で明主様御墓所(箱根聖地・奥津城)を参拝させて頂きました。

昨年からお誘いを行い、準備段階では先方の「宗教法人東方之光」の担当者の方とも打ち合わせを重ね、足腰の不自由な方でも御参拝が許されるよう、様々なご配慮をいただきました。そのおかげで、最初は遠慮されていた方にも参拝のお気持ちが生え、総勢二十五名での団体参拝となりました。

当日は早朝の出発となることから希望者は本部に前泊し、楽しい懇親会も行われました。

翌朝、マイクロバスと教団車の計二台にて朝七時に本部出発、道中の和気あいあいとした雰囲気を楽しみつつ、午前十時に現地に着きました。参拝者は徒歩にて、また足の不自由な方は、「東方之光」側のご配慮により教団車で奥津城前まで移動し、拝座広場にて戸塚祭主の先達のもと一同で明主様御墓前にて御参拝をさせて頂きました。続いてお隣の二代様御墓前での御参拝、紫微宮(しびきゅう)御参拝、さらに休憩所のモニターを通



1月15日、会長は明主様御墓所に向かわれ明主様に新年の御挨拶の御参拝をされました。



大文字焼きを背景に記念撮影。



令和6年に完成した紫微宮のラウンジにて。

して光明神殿への御参拝が各場所へ移動して執り行われました。

その中で、紫微宮(しびきゅう)

は令和六年末に落成した新しい施設であり、岡田宗家の御霊様を中心に様々な御霊様がお祀りされている御宮であり、大沼光彦先生の御霊様も「功労者」として合祀されておられます。

参拝終了後は休憩所にて昼食をとり、その後は各々、神仙郷など

周辺の名勝を散策するなど自由に時間を過ごしました。出発時刻をむかえた午後一時過ぎ、一行は箱根を後にして帰路につき、無事本部に到着致しました。この日を無事に終えることができた事を、本部御前にて一同感謝の心をこめて参拝をさせて頂きました。

週間天気予報では降雪や路面凍結などの可能性が報道されておりましたが、当日は好天に恵まれ路面凍結も無く、交通への影響も無く、御参拝をはじめ美しい庭園や景観を心行くまで楽しむことができました。また、この度の御参拝では明主様の御許にて、日々の御守に対する感謝と自身の信仰姿勢、これからの活動における誓いをお捧げし、参拝者の皆様が共に喜びを分かち合えたことを心から感謝致します。



休憩所のモニターを通して光明神殿の御参拝をさせて頂きました。



和やかな雰囲気の中で昼食をいただきました。



本部到着後、この日の御守護に対する感謝の参拝をさせて頂きました。

四季の御詠

明主様が春を詠まれた短歌をご紹介します。情景を思い浮かべてみましょう。

「鶯」

ふとみたる
笹むらかげに動くもの
鶯ならめ初音聞かばや

(昭和九年二月十六日)

「春の曙」

ほのぼのと
白む障子にかけうつる
芽ぶきの枝に小鳥うごける

(昭和九年三月十六日)

「春の水」

釣り人は
浮子を見つめてうごなわず
流るともなき春の小川

(昭和十年三月十六日)

